

鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書(9)

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

1978・2

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会

序 文

大隅地区の埋蔵文化財分布調査は本年度（昭和52年度）で第3年次になります。

本年度の調査においても、1次、2次と同様多数の遺跡が発見されました。これらの調査結果は大隅地域史の解明に役立つとともに、「新大隅開発構想」の具体化に伴って、開発と文化財保護との調和を図るための貴重な資料となると思います。

本報告は、昭和52年度の調査概報であります。この調査概報が、今後の文化財保護のために活用いただければ幸甚です。

発刊に当たり、調査に参加された地元の方々をはじめ、御協力をいただいた串良町教育委員会等並びに関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

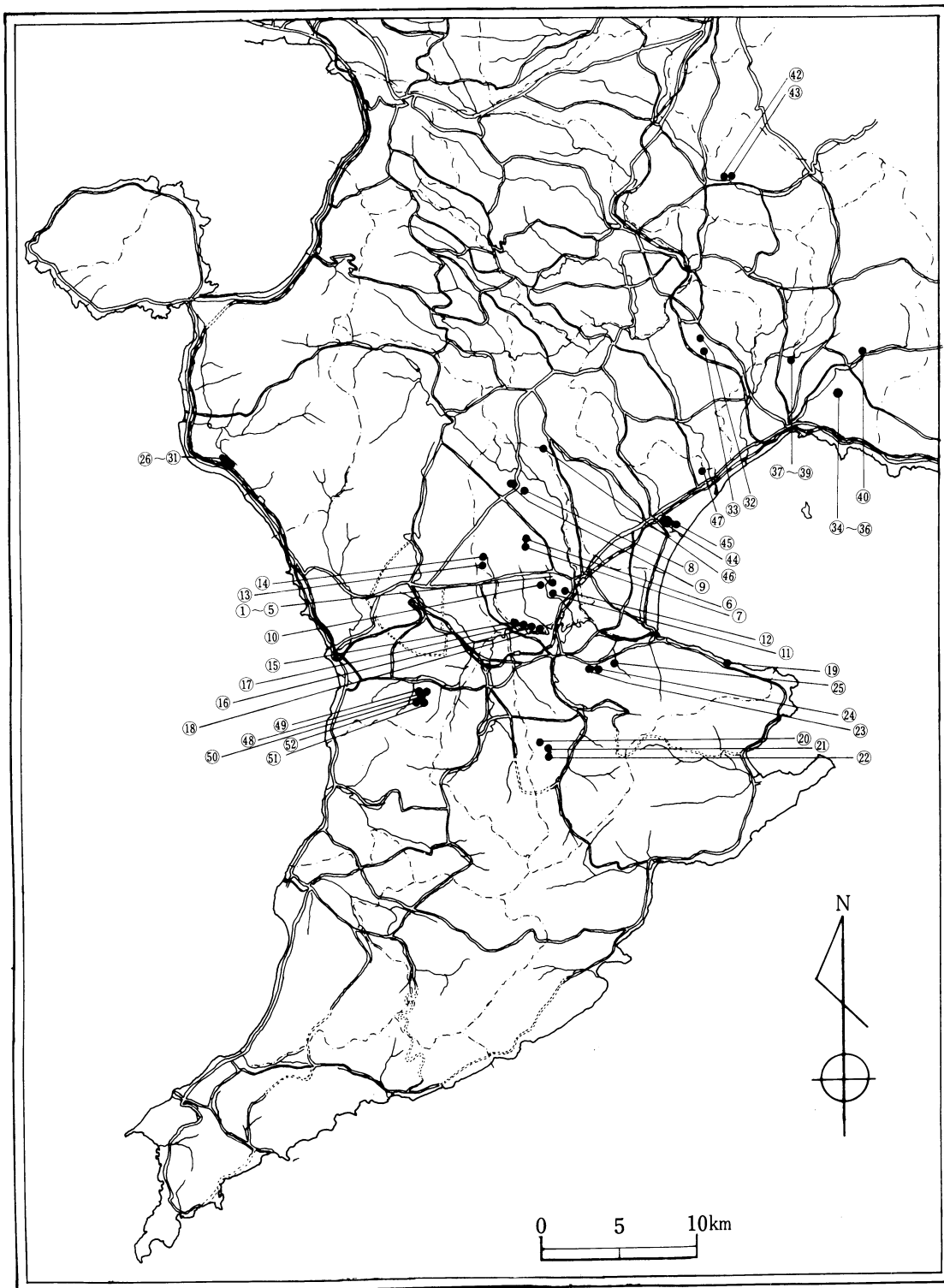
昭和53年2月

鹿児島県教育委員会教育長

国 分 正 明

例 言

1. 本書は、昭和52年度に実施した、大隅地区埋蔵文化財分布調査の概報である。
2. 調査の組織は調査の経過の中で記した。
3. 遺跡・遺物の実測図・写真等は立神，中村が分担して行った。
4. 本書の執筆及び編集は立神，中村が担当した。
5. 本書での市町村別管内の遺跡・遺物の項は，順不同である。
6. この報告書作成に当って，文化庁文化財調査官小林達雄氏，県文化財保護審議会委員河口貞徳氏に指導助言をいただいた。記して謝意を表する。



第1図 本書・所収の諸遺跡位置図 (④は欠番)

本文目次

序文

例言

第1章	調査の経過	3
第2章	各市町管内の遺跡・遺物	4
第1節	串良町管内の遺跡・遺物	4
第2節	高山町管内の遺跡・遺物	14
第3節	垂水市管内の遺跡・遺物	17
第4節	有明町管内の遺跡・遺物	19
第5節	志布志町管内の遺跡・遺物	20
第6節	末吉町管内の遺跡・遺物	23
第7節	大崎町管内の遺跡・遺物	24
第8節	鹿屋市管内の遺跡・遺物	26

あとがき

挿 図 目 次

第1図	本書所収の諸遺跡位置図	
第2図	上小原古墳群内出土の須恵器	(10)
第3図	上小原古墳群内出土の須恵器	(11)
第4図	古園遺跡採集の石坂式土器	(12)
第5図	フゾ山古墳周辺，古園遺跡採集遺物	(13)
第6図	倉園遺跡採集の块状耳飾	(22)

図 版 目 次

図版1—1.	上小原古墳群内出土の須恵器
1—2.	上小原古墳群内出土の須恵器左側面
1—3.	上小原古墳群内出土の須恵器右側面
図版2—1.	上小原古墳群内出土の須恵器
2—2.	上小原古墳群内出土の須恵器
図版3—1.	串良町フゾ山遺跡（甕棺口縁部）
3—2	串良町フゾ山遺跡（甕棺底部）
図版4—	古園遺跡（1～3），倉園遺跡（4），別府大丸迫遺跡（5），久保谷ノ口脇遺跡（6）
図版5—1.	串良町吉ヶ崎遺跡住居址（土器出土状態）
5—2.	串良町吉ヶ崎遺跡住居址（ピット検出状態）
図版6—1.	高山町塚崎遺跡土器出土状態
6—2.	高山町塚崎遺跡土器出土状態（櫛目波状文）
図版7—1.	高山町上原遺跡，住居址
7—2.	高山町上原遺跡土器出土状態
図版8—1.	垂水市柁原後ヶ迫遺跡，貝塚
8—2	鹿屋市南船ヶ迫遺跡，弥生式土器

第1章 調査の経過

大隅地区の文化財の分布調査については、昭和36年度国庫補助事業としておこなわれた遺跡台帳作成の基礎的調査のほかは、一部の研究者や郷土誌編纂の際に確認された程度であった。

しかし、本地域は南九州における高塚古墳（群）〔国指定史跡塚崎・唐仁・横瀬などを含む〕地下式横穴などをはじめとする埋蔵文化財の豊庫とされており、しかも地理的に古代文化解明の主要な指標となるものが多い。しかし、古墳を除けば、その古墳の成立に影響を与えたと思われる弥生期の文化については、個々に中期・後期の出土を知るのみであった。同様に縄文期の文化についても、志布志地方を除きあまり知られてない。そのために、全国遺跡分布調査の一環として、昭和50年度以降、民間の協力も得ながら分布調査を実施している。

昭和50年度の分布調査においては、多数の弥生時代の遺跡のほか、古墳などの埋蔵文化財包蔵地を発見した。

注①
昭和51年度の分布調査では、昭和50年度調査同様、大隅地区の文化財調査計画に基づき実施し、調査地域の拡大とともに、確認調査をも行い、さらに数多くの埋蔵文化財包蔵地の所在が明らかになった。

昭和52年度も鹿児島県教育委員会は文化庁の補助を得て、昭和50・51年度と同様の基本姿勢に基づき、4月1日から9月29日まで調査を実施した。

調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	文化課長	嶋元牧雄	
	文化課長補佐	荒田孝助	
調査 担当	文化課主事	立神次郎・中村耕治	
事務 担当	文化課管理係長	中条 亨・同主事	伊地知千晴

調査に当たっては、文化庁全国遺跡分布調査要領に準拠し、埋蔵文化財を中心に分布調査及び確認調査を行った。調査は悉皆調査を先行し、地下式横穴は聞きとりを重視した。さらに周知の遺跡については再点検をした。これらの中で一部については確認調査をも実施した。

調査地域は、串良町・高山町・垂水市・有明町・志布志町・末吉町・大崎町・鹿屋市の各市町の一部地区である。調査期間中は、各市町の遺跡の情報を得ては、現地調査を行い、古墳及び埋蔵文化財包蔵地の確認や試掘調査をも行った。

調査に当たって、関係各市町の教育委員会、地元の平岡武春・町田六男・実吉安尚・高風聞ミナ子・井上洋子・井ノ上秀文・峯崎幸清の各氏の協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

第2章 各市町管内の遺跡・遺物

本年度の調査地域は、串良町・高山町・垂水市・有明町・志布志町・末吉町・大崎町・鹿屋市の各市町の一部地区であった。各遺跡の遺物は鹿児島県教育委員会に保管されている。

第1節 串良町管内の遺跡・遺物

串良町は、大隅半島の東南部のほぼ中央に位置し、東は東串良町、南は高山町、西は鹿屋市東北は曾於郡大崎町と隣接している。

地形は、山林・台地・低地と大別され、大部分が畑地で、東部大半は笠野原台地に連なる畑地で黒色火山灰土に覆われ、北部に丘陵が連なり浸食谷が多くみられ、シラスとボラ層との台地となっており、それらの地帯を背景に串良川と肝属川が蛇行して流れ、沖積平野を形成している。

本年度、調査を実施した下小原・有里・細山田・岡崎・上小原地区は、弥生時代や古墳時代の遺物が広範囲に認められ、白寒水上・村迫・平野上・牧原・古柵・古園・牧山・上別府・柊ヶ迫の各遺跡および岡崎古墳群周辺は、特に、濃密な散布がみられ広範囲である。それぞれの遺跡について概略を述べる。

① しらそうず 白寒水遺跡

串良町下小原白寒水にあり、白寒水古墳群（遺跡地図番号71-011）と隣接した標高約30mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の東側は、甫木川が流れ水田地帯となり、その比高差は約20m以上である。遺物の散布状態は少ないが全面的にみられ、弥生式土器、土師器、須恵器などの破片がみられる。

② しらそうずかみ 白寒水上遺跡

串良町下小原白寒水上にあり、標高約35mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の東側は甫木川が流れ水田地帯となり、その比高差は約35m以上である。白寒水遺跡より町道白城線を隔てた北西部約350mの所にある。遺物の散布は広範囲に著しく、弥生時代中期と思われる土器の口縁部、三角突帯を有する土器の破片などがみられる。

③ なべいけ うえ 鍋池ノ上遺跡

串良町下小原鍋池ノ上にあり、標高約30mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の東側は甫木川が流れ水田地帯となり、その比高差は約18m以上である。白寒水遺跡南側にあたる。遺物の散布は少ないが全面的に見られ、弥生時代中期と思われる土器の底部、成川式系統の土器の破片、土師器の破片などがみられる。

④ ^{ごとうぎこ}後藤迫遺跡

串良町下小原後藤迫にあり，標高約28mの台地上に位置する。台地の東側を甫木川が流れ水田地帯となり，その比高差は約20m以上である。鍋池ノ上遺跡の南側にあたる。遺物の散布は少ないが全面的にみられ，弥生時代中期と思われる土器の破片・土師器の破片などが見られる。

⑤ ^{むらさこ}村迫遺跡

串良町下小原村迫にあり，標高約20mの台地上に位置する。台地中央部付近を縦断する農道原口線東側沿いで，後藤迫遺跡の南側にあたる。遺物の散布は著しくみられ，成川式系統の土器の破片，須恵器の破片，土師器の破片，青磁の破片などが見られる。

⑥ ^{ひらのうえ}平野上遺跡

串良町下小原平野上にあり，標高約56mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部東側に甫木川が流れ水田地帯となり，その比高差は約40m以上である。北側に谷を隔てて約350mの所に成原遺跡がある。遺物の散布は著しく広範囲にみられ，成川式系統の口縁部・底部と思われる土器の破片などが見られる。

⑦ ^{まきはら}牧原遺跡

串良町有里牧原にあり，標高約62mの舌状台地上に位置する。舌状台地南側に甫木川が流れ，その比高差は約42m以上ある。豚舎建設のため一部壊されている。遺物の散布は著しく広範囲に見られ，成川式系統の口縁部・胴部・底部と思われる土器の破片などが見られる。

⑧ ^{いりべぼり}入部堀遺跡

串良町細山田入部堀にあり，上ノ鼻遺跡と隣接した標高約90mの台地縁辺部に位置する。遺跡地西側沿いに細山田小学校がある。遺物の散布は少ないが，以前，耕作中に土器の完形品の出土がある。遺物は弥生時代中期と思われる土器の口縁部，成川式系統の土器の破片などが見られる。

⑨ ^{まきやま}牧山遺跡

串良町細山田牧山・新堀込にあり，標高約110mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部南側および東側は国道269号線が走り，細山田の集落の東側端部に沿っている。遺物の散布は著しく広範囲にみられ，弥生時代中期と思われる土器の破片，成川式系統の土器の破片，石鏃などが見られる。

⑩ ^{ふるがらん}古柵遺跡

串良町岡崎古柵にあり、標高約41mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の西側は甫木川が流れ水田地帯となり、その比高差は約30mである。遺跡地北側は国道220号線に接している。遺物の散布は著しく広範囲にみられ、弥生時代中期の土器の破片、成川式系統の土器、土師器の破片などが見られる。

⑪ ^{ふるぞの}古園遺跡

串良町岡崎古園、浮石塚にあり、古柵遺跡・上ノ馬場遺跡（遺跡地図番号71-015）と隣接した標高約35～37mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の西側は甫木川が流れ、水田地帯となり、その比高差は約23～25m以上ある。遺跡地の中央部よりやや先端側を町道白城線が横断し、先端部は土砂採集がおこなわれ壊されている。遺物の散布状態はかなり著しく広範囲に見られ、遺跡地の範囲も広いものと思われる。遺物は、縄文式土器の石坂式の口縁部（第5図、図版4）、弥生式中期の土器、成川式系統の破片、土師器などの破片が見られる。

⑫ ^{こづか}小塚遺跡

串良町岡崎小塚・東ノ畑・天禎島にあり、岡崎古墳群（遺跡地図71-28）も含む標高約30mの舌状台地上に位置する。舌状台地の東側は^{注①}県道串良一内之浦一大根占線及び国有鉄道古江線が走り、肝付の沃野が広がり、串良川が流れ、その比高差は約25mである。東側は甫木川が流れ、その比高差は約20mとなる。遺物の散布は著しく広範囲に見られ、弥生時代中期の口縁部、成川式系統の土器、須恵器、土師器の破片などが見られる。

⑬ ^{かみべつよ}上別府遺跡

串良町上小原上別府・下別府にあり、標高約66mの台地上にある。台地の南側に中山養魚場があり、北西側は鹿屋市・串良町・高山町との三方境となる。北東側には柵木迫遺跡が約500mの所にある。遺物の散布は著しく広範囲に見られ、弥生時代中期の口縁部、成川式系統の土器、須恵器、土師器の破片などが見られる。

⑭ ^{くぬきざこ}柵木迫遺跡

串良町上小原柵木迫にあり、標高約71mの台地上に位置する。台地の南側には中山川が流れ、その比高差は約50mとなる。遺物の散布は著しく広範囲にみられ、弥生時代中期と思われる土器、成川式系統の土器、須恵器、土師器の破片などが見られる。

⑮ ^{かみこまき}上小牧遺跡

串良町上小原上小牧にあり、吉ヶ崎遺跡と谷を隔てた西側の標高約30mの舌状台地縁辺部に位置し、周辺に上小牧古墳が存在している。

この地域は、昭和10年頃より始められた基盤整備事業の為に遺物包含層までの深さが浅く、遺物包含層が削平されている地点も部分的にみられる。遺物包含層は場所により若干変化はみられるが、地表面下約20～50cmあり、出土遺物は小破片が数多く見られる。標準層序は、第1層、耕作土（灰黒色土層）、第2層、黒色土層、（弥生遺物包含層）第3層ボラ層、第4層、黒褐色粘質土、第5層、黒色粘質土層となる。

出土遺物は、弥生時代中期の土器、成川式系統の土器と思われる小破片が数多く見られるが、耕作中にイモ穴より数多くの完形品が出土したと言われている。層序については今後検討を要し、色調など詳細については本報告書で述べる。

⑯ ^{ぜんがめおか}銭亀岡遺跡（遺跡地図番号71-12, 71-32）

串良町上小原銭亀岡・役所ノ上にあり、上小原古墳群（遺跡地図番号71-26）に近接した標高約30mの台地上に位置し、遺物の散布が広範囲に見られた。

遺跡地中央部は、飼料や作物（麦・甘藷など）の栽培のため確認調査が不可能となり、同遺跡地周辺部において調査を実施した。

同遺跡は、遺跡地中心よりかなりの距離があり、範囲確認のためにも有意義であり、作づけに影響を与えない範囲の調査となった。層序については、上小牧遺跡同様に基盤整備事業のためか、中には攪乱を受けている地点や耕作土直下に第3層のボラ層が現われ、遺物包含層が削平されている地点もみられた。標準層序は、第1層、耕作土（灰黒色土層）第2層、黒色土層、（遺物包含層）、第3層、ボラ層、第4層、黒褐色粘土層、第5層、黒色粘質土層となり、小牧遺跡の層序と同様であり、地点によりかなり土の移動の激しい所も確認された。

出土遺物は、弥生時代中期の甕の口縁部の破片などが見られ、遺跡地中心部よりかなり離れているために希薄な出土状態であった。層序については今後検討を要し、色調など詳細については本報告書で述べる。

⑰ ^{よしがき}吉ヶ崎遺跡（遺跡地図番号71-016）

串良町上小原吉ヶ崎・西ノ上にあり、南側を肝属川が流れ、東西に谷が入り込んでいる標高約30mの舌状台地上に位置している。遺物の散布は著しく、弥生時代中・後期の土器の破片の出土が見られる。

調査地点は、昭和10年頃より始められた基盤整備事業の影響は余り見られないが、遺物

の散布が著しく広範囲にみられ、耕作者によると『甘藷保存用のイモ穴を深く（平均して1mぐらい）、多数に掘るために、今まで完形品や土器の破片などが地表面にあがる』とのことである。

調査地点の層序については、第1層、灰黒色火山灰土層、第2層、黒色土層、（遺物包含層）第3層、ボラ層、第4層、黒褐色粘質土層となり、第2層（黒色土層）に弥生中期の遺物包含が見られ、遺構（住居址）は第3層上面で確実に検出され、第4層・第5層（上部）まで影響がみられる。遺構について、層序の概略で少しふれたが、1号・2号住居址の遺構検出がみられる。さらに70m離れた地点より遺構の検出が見られたが、作づけの関係で拡張は不可能で、1号・2号住居址同様に全容は判明されない。1号住居址と2号住居址は切り合い関係にあり、1号住居址が先行するが、遺物から判断すれば余り時間差はないと思われる。住居址の掘り込みは、第2層が黒色土のために判断に苦慮したが、下部付近でその形跡がみられ、第3層ではっきりと判明した。住居址内の埋土状態を見ると第2層の黒色土で、第3・第4・第5層がブロック状に入っており、焼土が見られる。1号住居址はピット及び階段状の施設が確認され、2号住居址はピットの検出が見られる。遺物は住居址床面に密着し、完形品の数個体が出土し、木片状の炭化物、焼土が1号住居址に全面的にみられ、おそらく火災によるものと考えられる。

出土遺物について、1号住居址から弥生中期の甕形土器の完形品5、（うち突帯付2）壺形土器の完形品4（やや頸部の長いもの、小形、大形2）のほか土器の破片が数多く見られる。他に木片状の炭化物が多量にみられる。2号住居址から弥生中期の壺形土器が見られる。1号・2号住居址ともに土器の破片が見られるが、1号住居址には完形品が多く見られる。層序の色調、遺構、遺物など詳細については本報告書で述べる。

⑩ 上小原古墳群（遺跡地図番号71-26）

串良町上小原字神ノ園・田ノ上、馬場中にまたがる古墳群であり、南側に肝属川が流れている標高約20mの台地上に位置している。前方後円墳1基、円墳20基、地下式横穴4基の群集墳であり、円墳6基、地下式横穴1基は消滅している。地下式横穴の1基は昭和51年3月に発掘調査が実施された。

昭和52年8月29日、部落道路^{注①}拡幅工事建設現場を通りかかった時、道路面より約1mの段差の畦畔の断面（地表面より深さ30cm）に須恵器の破片を発見した。

出土地点は上小原古墳群内にあり、同古墳群4号墳前方部先端より南西へ約10m、同古墳群5号墳墳丘より南西へ約20mの所で、高吉ヤエ氏宅地内道路面にあたる。同地点は道路と住宅との間隔もなく、さらに工事作業により完全に切り取られるために、遺物の取り上げの処置となった。

これらの須恵器は、俗に俵壺と呼ばれる大形罌・罌・有蓋壺とセットと考えられる蓋の

る点であり、大阪府陶邑古窯群の編年にあてるとすれば、この須恵器はⅠ期（TK 208，TK 23）に類似している。県内での出土は珍しい。

注②

大型はそう甗（俵壺）（第2図1・第3図1）

口縁径9.1cm，器高18.9cmで，口頸部と口縁部の間に小さくて鋭い突起がめぐり，口縁部はやや外反し楕描き波状文が施される。本体はビール樽を横倒しにした形であり，体部中位よりやや上に径1.3cmの円孔を穿つ。円孔の両側には楕描波状文を縦に巡らす。左右対称でない。楕描き文の外側には左右共に二条の低い突帯が巡る。体部の両側面は厚さ0.8cmの円形円盤を貼りつけてある。側面には左右ともに楕描文が施され，左側面に波状文を径約8cmの円形状に施した後で，十字状に楕描き直線文を施してある。右側面は波状文を径約8cmと3cmの同心円状に施した後で，縦位横位に楕描き直線文が施してある。口縁部と体部の貼りつけは明確でないが，頸部の内側では指による押圧のあとに，横なで調整が施されている。焼成は良好であり色調は青灰色で，断面は赤紫色を呈し，自然釉が認められる。完形品である。

はそう甗（第3図2）

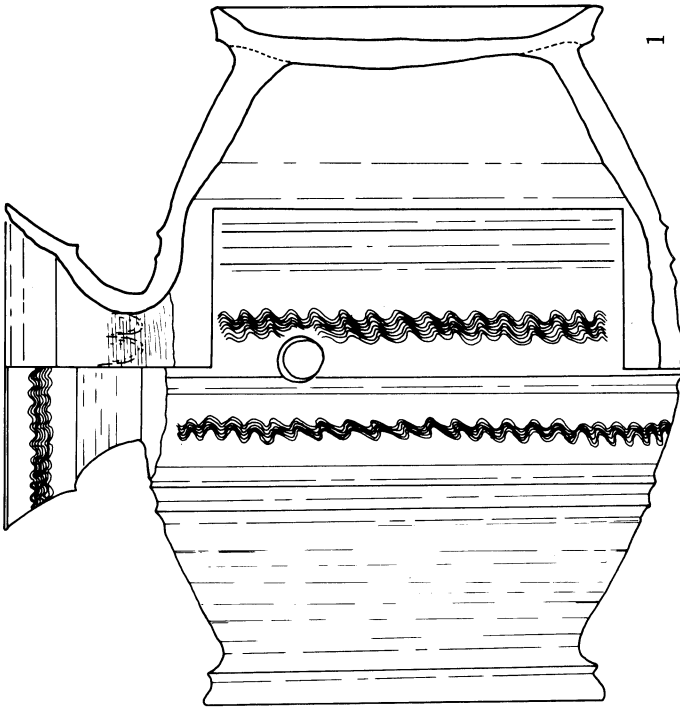
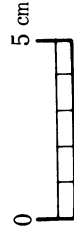
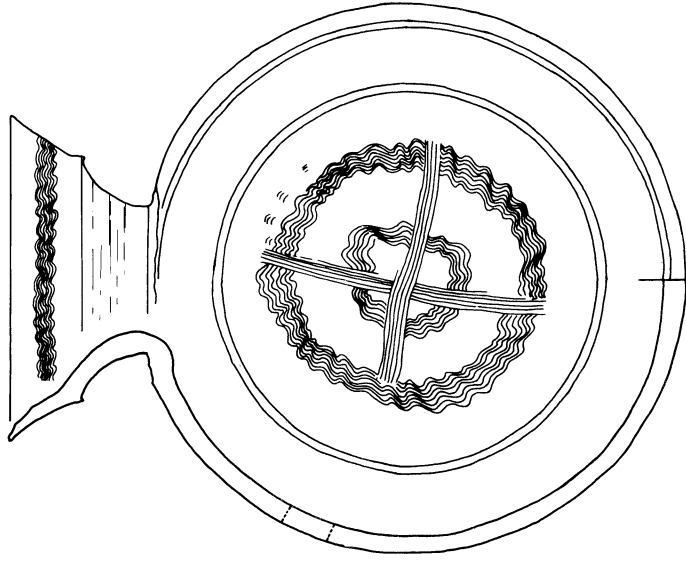
口縁径9.2cm・器高11.7cmで，口頸部と口縁部の間には小さくて鋭い突帯がめぐり，口縁部はやや外反し，大型甗とほとんど同じである。体部は肩がよく張って居り，その最も張った部分に径1.1cmの円孔を穿つ。底部内面は棒状の道具で押圧した痕が見られる。焼成は良好であり色調は青灰色を呈し，自然釉が認められる。完形品である。

かた蓋（第3図3）

口縁径12.2cm・器高5.4cmで，口縁部は短く「く」の字状に外反し，口縁内側は，わずかに内彎する。天井部は全体に丸みをおびて，ヘラ削りによる調整が施されている。この蓋は，有蓋短頸壺とセットになるものと思われる。焼成は良好で，色調は青灰色を呈する完形品である。

串良町岡崎古園遺跡・串良町下小原フゾ山古墳の採集遺物（第4・5図）

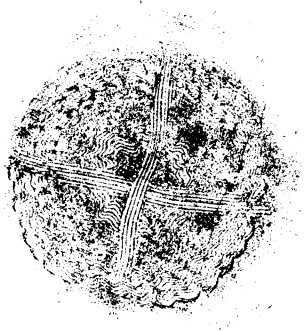
1.（第4図一）器形は口縁部が外反し，山形波状口縁をもつ円筒土器で，施文は，口唇部に連続する羽状の刻みが施され，刻みの交点は若干山形に高くなり，口縁外面には，（口唇部より約5cm下まで）横位の貝殻刺突文（線）が施され，それ以下は縦位の条痕文の後から比較的強い横位の条痕文がみられ，一見格子目風の地文で区画されてある。内面は，口縁部から現存する胴部まで横位のヘラ磨きの丁寧な整形がみられ，光沢をもっている。色調は外面が褐色を呈し，内面は赤褐色である。胎土には石英・長石粒が観察さ



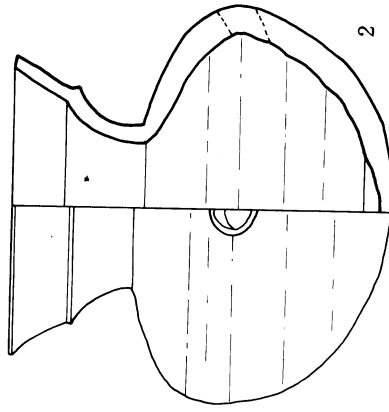
第2図 上小原古墳群内出土の須恵器



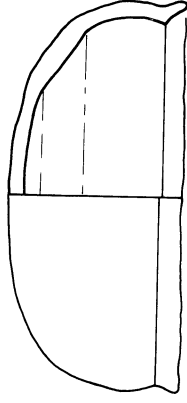
1の左側面拓影



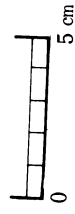
1の右側面拓影



2



3



第3図 上小原古墳群内出土の須恵器

れる。この縄文式土器は器形の上からは、石坂式土器に属するものと考えられる。

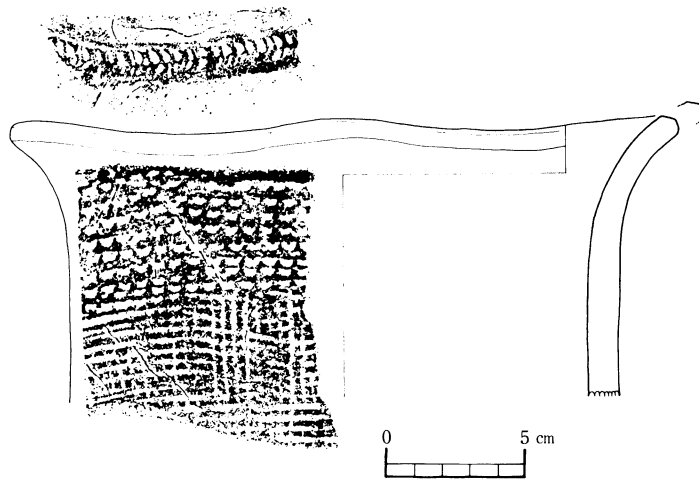
2. (第5図-3) 土師器の高坏脚部である。脚高は13cm、脚部端の径10cmを測り、裾部端はわずかにふくらみ、緩やかに広がりながら裾部にいたる。脚柱部に径0.9cmの小円孔を3ヶ所に穿つ、裾の張った部分に強い刷毛調整痕が見られ、脚柱部は磨かれている。焼成は良好で、色調は外面で赤褐色、内面で黄褐色を呈している。

3. (第5図-4) 土師器の鉢型土器完形品である。口縁径19cm、底部径8.8cm、器高は11cmを測る。外面は刷毛調整痕がみられ、内面上部においては指による調整の後に、刷毛のなで調整が施され、内面下部は篋整形の跡がみられる。色調は黄褐色を呈している。

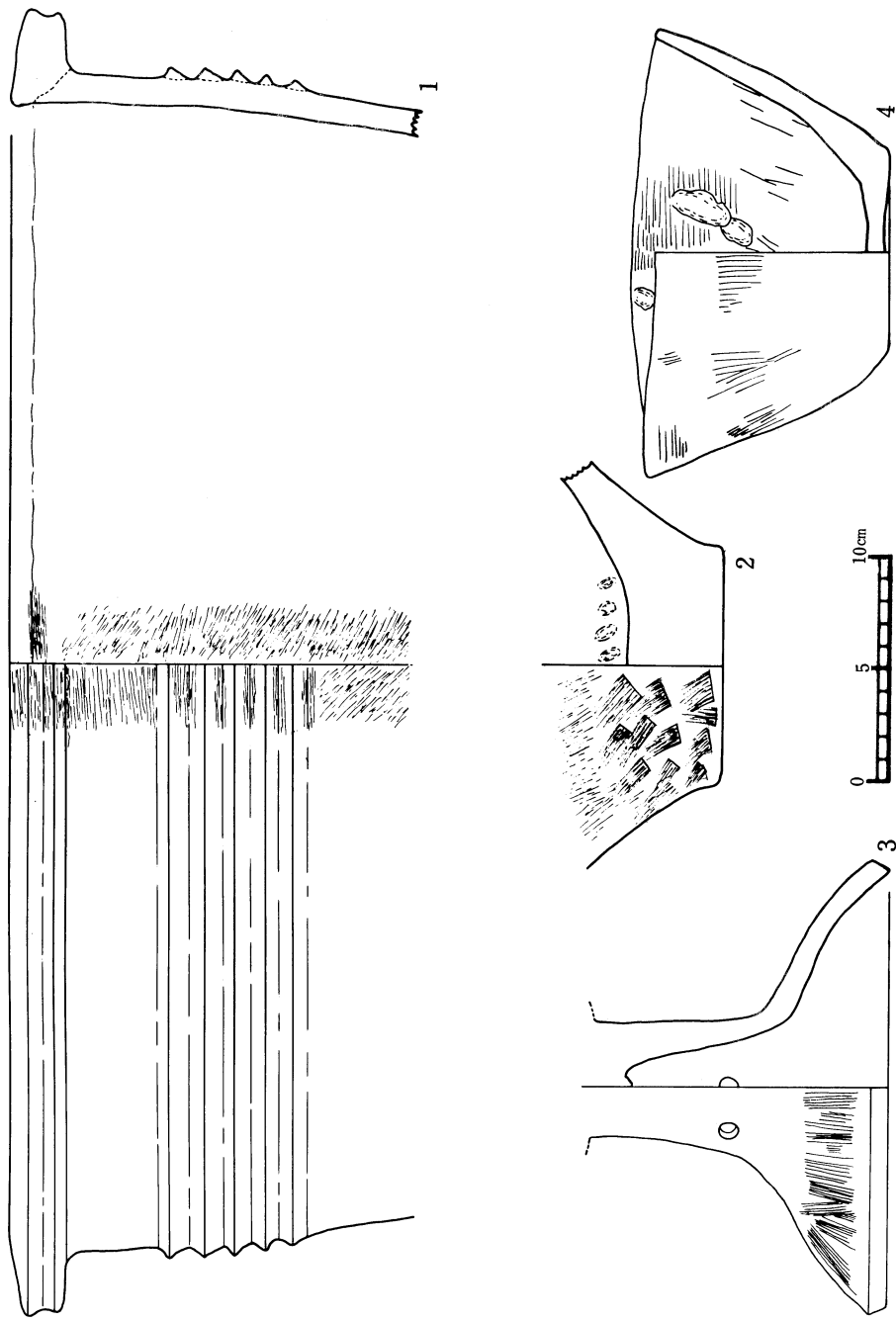
4. (第5図-1) 口縁部外径58cm・内径50cmであり、口縁部は逆L字状を呈するが、口縁端上面は下降し、口縁端部に窪みが見られ、口縁内面は僅かに内彎する。口縁部は貼りつけ技法である。口縁部下位に5条の貼りつけ三角突帯を有している。整形は、突帯部分まで刷毛による横なで調整で、突帯より下位は斜位による刷毛なで調整が施され、内面は弱い刷毛による調整がみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土には金雲母・石英・長石粒が認められ、焼成は良好である。

5. (第5図-2) 4と同一個体と思われる底部である。底部は径10.2cmである。外面は刷毛調整痕が見られる。色調・胎土・焼成は4と同様である。

4と5は同一個体で、弥生時代中期に比定される甕棺の破片と思われる。1～3は古園遺跡先端部土取り場跡地よりの採集遺物で、4・5はフゾ山古墳の立地する台地縁^{注①}端部の土取り跡地よりの採集遺物であり、2～5は串良町岩崎在住の西田氏(西田飼料店経営)により採集され、2・3は西田氏の所有物である。1・4・5は鹿児島県教育委員会に保管されている。



第4図 古園遺跡採集の石坂式土器



第5図 フゾ山古墳周辺，古園遺跡採集遺物

第2節 高山町管内の遺跡・遺物

高山町は大隅半島の東南部のほぼ中央に位置し、東北の一部は志布志湾となり、東南は山岳が重なり八甫与志岳（968m）を中心とした国見山系で、内之浦町・大根占町と接し、西は肝付平野を隔てて、吾平町、鹿屋市に連なり、北部は蛇行性の強い肝属川によって、串良町・東串良町と境をなしている。

地形は山林・畑地・水田地帯とに大別され、水田・山林の占める割合が大きい。国見の連山が北へ傾斜し、北西に水田地帯が展開され、その地形はほぼ三角形を呈しており、国見、高隈の連山より流れ込む河川により沖積平野が形成され、肝属川が蛇行しながら流れ込んでいる。

本年度、調査を実施した塚崎・後田・波見地区は縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物散布がみられ、塚崎遺跡・上原遺跡・道中原遺跡はとくに濃密な散布がみられた。各遺跡について概略を述べる。

⑱ かりや 仮屋遺跡

高山町波見有明仮屋にあり、標高約59mの丘陵末端の畑地に位置している。丘陵の西側に仮屋川が流れ、北側は志布志湾となり、東側は棚田となる。仮屋川までは約20mで、県道串良一内ノ浦一大根占線沿い田吹商店に隣接している畑地である。遺物は、縄文時代晚期、弥生時代と思われる土器の破片がみられる。同遺跡地は、乙甲神社境内遺跡と床滑遺跡のほぼ中間にあたる。

注⑥

⑳ どうちゆうばい 道中原遺跡

高山町後田道中原にあり、標高約30mの舌状台地上に位置している。舌状台地の眼下東側は塚川が流れ、その比高差は約10～20mであり、県道小浜一高山線にかかる第1論地橋より南へ2kmの所にある。遺物の散布は広範囲にわたる。高塚古墳も存在するが、すでに数基は壊され、現存している古墳も一部削平されている。遺物は、縄文時代前期・晚期、弥生時代中期、成川式系統（丹塗り土器を含む）、須恵器（口縁部・底部の破片を含む）、土師器（口縁部・頸部の破片を含む）などの破片が見られる。鉄製品として直刀三振りがみられ、うち二振りは完形に近く、鹿児島県教育委員会保管の一振りは、現存長73cmで刃先が破損しており、片側で茎の長さ15cmを計り、木質に被われている。高山町教育委員会に一振り保管されている。

㉑ しんぼりのうえ 新堀ノ上遺跡

高山町後田新堀ノ上にあり、標高約38mの台地縁辺部寄りに位置している。台地縁辺部の西側は塚川が流れ、その比高差は約18mである。県道新富一吾平線より南側へ約0.7km

の所にあり、遺跡地西側沿いに、高山町農協協同組合養豚センターと隣接し、道中原遺跡までは、南西へ、塚川を隔て約0.7kmある。遺物の散布は多くないが広範囲にみられ、縄文時代(吉田式土器)と思われる破片、弥生時代中期、須恵器、土師器の破片などが見られる。

⑳ ^{かみなかまき}上中牧遺跡

高山町後田上中牧にあり、標高約47mの台地上に位置している。台地の眼下西側は塚川が流れ、その比高差は約26mであり、東側は高山川が流れ、同台地より両河川までは同距離にある。新堀ノ上遺跡より南側へ約900mの所に立地する。遺物の散布は多くないが、地区においては濃密な所もみられ、弥生時代中期の三角突帯を有する土器の破片、土師器などの破片がみられる。

㉑ ^{つかざき}塚崎遺跡 (遺跡地図番号71-51)

高山町野崎塚崎にあり、国指定史跡塚崎古墳群の立地する同一台地で、標高約30mの舌状台地縁辺部に位置する。通称塚崎台地で、西・北・東側は標高約5~10mの水田地帯となり、その比高差は約10mである。同台地は、全域に弥生中期と思われる土器の破片、成川式系統の土器などの破片の散布がみられる。台地先端寄りを県道串良一内之浦一大根占線が走っている。その県道建設の折、数基の地下式横穴が発見され、現在でも県道断面に削平された地下式横穴が現存している。

^{注③}遺跡地は、高山町在住の鳥越一平氏所有の畑地で、土取り作業中に遺物の発見がなされ、確認調査を実施した。遺跡は表土層が土取りの為に、剥ぎ取られた段階で、包含層までの影響は余り見られないが、一部削平された地点も見られ、遺物散布が確認される。表土層を削平された為か、遺物包含層までは残く、遺物の出土が見られる。標準層序については、第1層、耕作土(灰黒色火山土)第2層、黒色土層(やや粘質気味)で遺物包含層となる。第3層a、黒褐色土層(軽石混じり)第3層b、黄色軽石層(パミス状のもの)第3層c、灰色の火山礫を含む層、第4層、黄茶褐色土層(やや暗く粘質気味)、第5層オレンジ色を呈する土層(粘質気味)、第6層、砂層となる。色調は仮称で今後検討を要し、詳細は本報告書で述べる。遺構は7つのピットが第3層a上面で見られ、現段階では性格は不明である。

出土遺物は、弥生中期の壺形土器の口唇部に波状の櫛目文の施文がみられる土器・底部・手捏小形土器・器台・埴・三津永田式土器・高坏などの遺物がみられ、遺跡調査地点南側沿いの畑地付近に土器の密な出土がみられ、断面に確認される。^{④注}

㉒ ^{うえばい}上原遺跡 (遺跡地図番号74-38)

高山町野崎字六郎塚、原口・平入道・宝仙寺にあり、標高約13mの舌状台地上に位置す

る。県道串良一内之浦一大根占線沿い南側の舌状台地で、県道より上原部落へ通ずる町道上原一平野線の東西地区に立地し、西・北・東側は水田地帯となり、その比高差は約8mである。同遺跡地は塚崎古墳群より約30mの所で、同台地町道崖面に住居址を確認したとの記載がある。『野崎上原入口の道路の南側に、昭和三十三年五月、北園氏により、同じく弥生時代の住居址が発見され、文部省資源科学研究所の和島氏と共に確認されたが、未だ正式の発掘調査は実施されていない。尚、表面採集された壺の破片や石器類は波野中学校に保存されている。』と記載されている。現在は雑草の為に確認しにくい。

調査は、字平入道・字宝仙寺^{注⑤}を主体的に実施し、字宝仙寺について集中的に遺物の出土が見られる。同台地内は畑地開墾時のためか土の移動が激しく、遺物包含層はすでに削平された所が多く見られ、又、包含層が確認されても非常に浅い。層序は、第1層、耕作土（灰黒色火山灰土層）、第2層、黒色土層、（遺物包含層）、第3層a、黒褐色土（軽石混じり）第3層b（黄色軽石層）第3層c（灰色の火山礫を含む層）、第4層、（黄褐色土層）となる。色調については仮称で今後検討を要し、詳細は本報告書で述べる。遺構については住居址と考えられるプランが検出され、掘り方確認面でとどめた。その他にピット群の存在が確認できた。

出土遺物は、弥生中期の壺形土器・甕形土器・三津永田式土器、成川式系統の土器、土師器、須恵器等である。

②⑥ ^{わだじょう}和田城遺跡（遺跡地図番号74—54, 74—90, 74—100）

高山町野崎和田城にあり、標高約36mの丘陵地に位置する。県道串良一内之浦一大根占線を隔てた南側に立地し、北東側県道沿いに波野小・中学校があり、眼下北部は水田地帯で、その比高差は約30mである。南側は国見連山の山岳地帯へと連なる。同遺跡地は、弥生時代中期の土器、土師器、須恵器、石斧などの散布地とされている。城址についての記載に肝属氏出城のひとつで、本丸、二ノ丸、馬乗場掘割等現存と記されている。

遺跡地東側は、一部土取り採集で削平されてる。近年まではみかん園^{注⑥}として使用されていたが、現状は杉の植林がなされているものの、雑木・雑草が生い茂り、踏み込むにも困難な状態であり、異常なダニの発生のために土層は確認されなかった。同台地内は、みかん園、植林のため、大幅な攪乱が一部に見られ、遺物包含層上面にまで影響を及ぼしている。層序については、調査地点でかなりの相違がみられ、対比が困難で今後検討を要する。

出土遺物は、縄文時代晩期（黒色研磨土器）・後期と思われる土器の破片・青磁などの破片が見られるほか鉄滓・鞆ノロ（径6cm、孔径2.6cm）など見られ、タタラ本体は発見出来なかった。

第3節 垂水市管内の遺跡・遺物

垂水市は大隅半島の北西部、錦江湾に面するほぼ中央に位置し、東は高隈山を隔てて、鹿屋市・輝北町に接し、北は福山町、西は錦江湾に面した海岸線となり、東桜島町に隣接し、南は鹿屋市と接している。

地形は東の高隈山、北東の牛根の山岳を中心とする山岳地帯と、山岳の麓から海岸地帯へと広がるシラス台地、海岸線が河川流域に立地する沖積平野及び低地とにより成り立っている。

本年度、調査を実施した柁木原地区は、以前から貝殻（貝塚と想定）や土器の散布が多くみられ、明治33年、マンロー博士が大隅地方の「クノキハラ」の近くで貝塚を発見しており、同市内浜平町のシオンモイ遺跡の調査を行っている。この「クノキハラ」は柁木原のことであり、〇〇比良という字名が多く見られ、シオンモイ^{注⑦}遺跡（遺跡地図番号11-4、11-10）まで距離は約3kmで、それまでの間は同じ様な環境に立地している。

遺物の散布は、縄文時代晩期、成川式系統と思われる土器片が広範囲にみられ、後ヶ迫遺跡、横道遺跡の周辺一帯には、貝殻を伴って顕著にみられる。層序については、概略を述べ、各遺跡の概略の中では割愛し、詳細については本報告書で述べる。第1～3層、土石流のためか二次堆積層で、砂・大小の軽石・シラスなどが混じった層である。第4層、茶褐色土層（砂層）で旧耕作面と思われる。第5層、暗茶褐色土層（有機質まじりの火山灰層）で成川式土器の遺物包含層であると同時に、後ヶ迫遺跡地においては、約20cm幅で貝殻の層がみられる。

第6層、黒色土層（やや粘質気味）で縄文時代晩期の文化層である。層位は場所により若干の変化がみられる。それぞれの遺跡について概略をのべる。㊸-㊿は同一地区である。

㊸ くぬきばらうしろがきこ 柁木原後ヶ迫遺跡

垂水市柁木原後ヶ迫にあり、数十m以上のシラス台地の崖が迫る標高約11～14mの沖積地に位置する。遺跡地南側に国有鉄道大隅線が走り、北側崖下に墓地がある。遺物の散布は広範囲におよび、成川式系土器の破片と共に貝殻の散布も見られる。

調査地点は、土石流のためか二次堆積がみられ、遺物包含層まで地表面より80～170cmまでの深さで確認され、二次堆積層も場所により変化がみられる。出土遺物は、成川式土器の甕形土器の大形で、一条の突帯を有し、口縁はやや内彎するもの、中形で研磨されたもの、壺形土器は、幅の広いかまぼこ突帯を有するもの、高坏の研磨されたものや鉢、浅鉢、須恵器などがみられ、貝殻の出土も多量にみられた。貝の種類はモクハチアオイ貝（二枚貝）が主で、イモ貝、パイ貝、カキなどが多くみられ、貝塚であると考えられる。

㊿ いちのぞのあと 柁木原市ノ園後遺跡

垂水市柁木原市ノ園後にあり、56.0mのシラス台地の崖の迫る標高約10mの沖積地に位

置する。後ヶ迫遺跡と隣接し、山神比良・横迫の両遺跡とも近接している。遺物の散布は多くはないが、成川式土器、土師器などの破片が見られる。

調査地点は、二次堆積がみられ成川式土器包含層まで、地表面下約 130 cm の所で確認される。出土状態は希薄な状態ではあったが、成川式土器片の出土が見られる。

⑳ **柗木原^{よこみち}横道遺跡**

垂水市柗木原横道にあり、国有鉄道大隅線沿い（水源地ポンプ室周辺）の標高約 10m の沖積地に位置する。山神比良・市ノ園後・山ノ園の各遺跡と近接している。遺物の散布は縄文晩期、成川式土器、貝殻などの散布が多量に見られる。

調査地点は、鉄道建設のためか一部削平され、耕作土中より成川式土器の破片がみられ一部攪乱を受けている所も確認され、地表面より深さ 60cm で、縄文時代晩期で包含層が確認される。出土遺物は成川式土器、縄文時代晩期の出土が見られる。鉄道建設の折、多量の貝殻の出土があったと言われ、周辺には貝塚の存在が確認される。

㉑ **柗木原^{やまがみひら}山神比良遺跡**

垂水市柗木原山神比良にあり、山ノ園遺跡と隣接する標高約 12m の沖積地に位置している、市ノ園・横道の両遺跡に近接し、北は数十 m の崖が迫り、遺跡地の東側から南側にかけて、表面には軽石・砂・小石などが見られる。成川式土器、土師器、須恵器の破片の散布が見られる。

調査地点は、土石流の為か二次堆積の影響で、地表面より遺物包含層までの深さが、地点により相違がみられ、地表面下約 50～120 cm で成川式土器の包含層が確認される。出土遺物は成川式土器の細片が、希薄な状態で出土を見る。

㉒ **柗木原^{やまのぞの}山ノ園遺跡**

垂水市柗木原山ノ園にあり、東側に数十 m のシラス台地の崖が迫る標高約 13～16m の沖積地にある。横道・山神比良の両遺跡と近接している。成川式土器片の散布が広範囲に確認される。

調査地点は、二次堆積は見られるが、場所により変化がみられ、層の幅は全体的に浅く成川式土器の包含層まで約 50～80cm あり、出土量は多くない。

㉓ **柗木原^{くすひら}楠比良遺跡**

垂水市柗木原楠比良にあり、標高約 15.0m の沖積地に位置する。東側はシラスの山林が迫り、山裾まで畑地となる。遺物の散布は成川式土器の破片が多量に確認される。

調査地点は、二次堆積の層幅がかなりあり、地表下約 150 cm で縄文時代晩期の遺物が確

認められ、東南約 600 mの所に湧水が見られる。

出土遺物は縄文時代晩期の口縁部、成川式土器の細片が多くみられる。

第4節 有明町管内の遺跡・遺物

有明町は曾於郡の南部に位置し、北は大隅町および松山町、東は志布志町、西および南は大崎町と隣接し、東南部は志布志湾に面している。

地形は、山地、台地、低地に大別され、北部は霧岳・中央部は野井倉周辺を中心とした山地北部の伊崎田から西部野外にかけて丘陵が連なり、浸食谷が多くみられるシラス台地、菱田川高下谷川、本村川の浸食された河岸段丘には水田が立地し、町のほぼ中央部を縦断する菱田川により沖積平野が形成され、水田地帯となっている。

本年度、調査を実施した伊崎田地区は弥生時代や縄文時代の遺物が広範囲に認められ、室田郎・山ノ口遺跡はとくに濃密な散布がみられる。両遺跡について概略を述べる。

㉔ むつたろう 室田郎遺跡

有明町伊崎田室田郎にあり、標高約 105 mの舌状台地上に位置する。台地眼下南側は、高下谷川が流れ沿岸を国有鉄道が走り、河岸段丘上に水田が立地している。北側は県道志布志一福山線が走り、台地縁に沿いは浸食谷で、棚田が発達する。遺物散布は、縄文式土器（貝殻刺突文・晩期など）、弥生式土器、成川式系統の土器などの破片がみられる。

調査地点は、台地南側人家周辺に、遺物包含層が確認される。同台地は園芸地帯のため、個人での基盤整備が行なわれ、すでに遺物包含層は、削平されている所も数多くみられる。

層位について、ほとんどの地点において削平され、耕作土直下に遺物包含層の確認がみられ、一部攪乱されている地点もある。第1層、耕作土（灰黒色砂質気味）、第2層、黒色土層、縄文時代晩期遺物包含層と考えられる。第3層、黒褐色土層（粘質気味）第4層、茶褐色粘質土層、第5層、黒色粘質土層となる。層位については検討を要し、色調については仮称であり、詳細については、本報告書で述べる。出土遺物には、縄文晩期と思われる土器の破片、石斧・磨石などがみられる。

㉕ やまのくち 山ノ口遺跡

有明町伊崎田西山ノ口にあり、標高約 137 mの舌状台地上に位置している、舌状台地の眼下東側および南側は浸食谷となり、比高差は56.0m以上あると見られよう。北側は県道志布志一福山線が走る。遺跡地は、山ノ口A・B・Cの三遺跡にわかれており、標高約 140 mの茶園畑も含まれる。遺物の散布は全面的にみられ、縄文時代全期に渡る土器の破片、弥生式土器の破片、石皿・磨石・敲石・石鏃・石匙などがみられる。

第5節 志布志町管内の遺跡・遺物

志布志町は曾於郡の東南部に位置し、北東から東に宮崎県都城市及び串間市と県境をなしており、北西から西は末吉町、松山町、有明町と接し、南は志布志湾に面した海岸線とから成り立っている。

地形は、山岳、台地・低地とに大別され、200m以上の山岳とその山岳に接する丘陵地は数多くの浸食谷が発達し、台地は火山灰台地で、南部は台地末端部より沖積低地と比高は40～80mで多くの浸食谷が急崖をなしており、西側末端部では5～20mの比高である。安楽川・前川・大矢取川の三河川を中心とする大小河川の浸食により細長い沖積低地を形成している。

本年度、調査を実施した地区は、別府地区・弓場ヶ尾地区・前畑地区で、遺物の散布は、別府地区が著しく広範囲にみられる。それぞれの遺跡について概略で述べる。

㊸ 別府大丸迫遺跡

志布志町帖大丸迫にあり、標高約65mの舌状台地縁部寄りの畑地に位置する。台地の西側は前川が流れ、その比高差は約61mである。山ノ上遺跡より北東へ約200mの地点にあり、東側は浸食谷となり湧水が多量あり水田がひらかれる^{注⑧}。同台地上は外牧へ通ずる町道が縦貫しており、町道両側沿の畑地を中心に遺物の散布が著しく広範囲にみられ、縄文時代後・晩期、弥生式土器などや、磨石・敲石などの石器も見られる。

調査地点は、前川と町道との間の台地縁部を中心に実施した。弥生期はすでに削平されており、縄文時代晩期および後期の包含層は、確認できたものの一部で、ほとんど耕作などにより削平されているが、縄文時代前期の包含層（吉田式・前平式と思われる）は残存している。遺構として、暗褐色粘質土層中より数基の集石遺構を確認した。性格は判明しない。層序は、第1層、耕作土（黒褐色火山灰土層で下部に黒色火山灰土が認められる所もある）。第2層、黄褐色火山灰土層（赤ホヤ）、第3層、灰褐色粘質土層（灰青色土層）第4層、暗褐色粘質土層（黒色粘質土層）第5層黄褐色粘質土層（黄褐色ローム層）となり、黄褐色粘質土層中より縄文前期吉田・前平式の出土がみられ、集石遺構もみられる。層序については今後検討を要し、色調については仮称で、本報告で述べたい。

㊹ 別府菖蒲畑遺跡

志布志町帖菖蒲畑にあり、大丸迫遺跡と同一台地の東側縁部寄りで、標高約60mの畑地に位置する。大丸迫遺跡より東へ約300mの地点にある。遺跡地の南側および東側は湧水が流れ水田となり、その比高差は約29mである。遺物の散布は、縄文式土器、弥生式土器、土師器などがみられる。

調査地点は、耕作の関係上、荒地を中心にその周辺地区を実施した。耕作による削平や

攪乱がみられ、弥生遺物包含層はすでに削平されており、一ヶ所の地点のみに縄文時代晩期の遺物包含層を確認したが、遺物の出土量はすくない。層序は大丸迫遺跡と同じで、第1層、黒褐色火山灰土層、第2層、黄褐色火山灰土層、第3層、灰褐色粘土質土層、第4層、暗褐色粘質土層、第5層、黄褐色粘質土層となる。

出土遺物は縄文時代晩期と思われる土器の破片などがみられ、希薄な出土状態である。

③⑥ ^{やなぎのもと} 別府柳ノ元遺跡（遺跡地図番号68-090）

志布志町帖柳ノ元にあり、標高約60mの台地縁辺部に位置する。菖蒲畑遺跡の南へ約150mの地点である。台地縁辺部の南および東側は浸食谷となり、湧水が湧き水田が立地し、その比高差は約29mである。遺物の散布は、縄文式土器、弥生式土器、土師器などがみられる。

台地縁端部の畑地で、作づけに影響を与えない地点を対象に確認を行った。地点により弥生時代の遺物包含層はすでに削平が見られ、第2層（黄褐色火山灰土）より縄文後期の遺物の出土が見られる。層序は大丸迫、柳ノ元遺跡と同じで、第1層、耕作土（黒褐色火山灰土）下部に黒色火山灰土が部分的に見られる所も確認される。第2層、黄褐色火山灰土層、第3層、灰褐色粘質土、第4層、暗褐色粘質土層、第5層、黄褐色粘質土層となる。しかし、第2・第3層まで削平されている地点も確認される。

出土遺物は第2層（黄褐色火山灰土）より縄文晩期と思われる土器の破片が確認されたが、遺物包含層上面は攪乱を受けている。大丸迫遺物の第4層、縄文時代前期の包含層は、この遺跡においては排土関係（作づけのため）の処理が出来ず、土層確認（色調）の段階で留めた。縄文時代晩期の破片、弥生式土器の細片などがみられる。色調については今後検討し、本報告で詳細は述べる。

③⑦ ^{みだたて} 札立遺跡

志布志町内之倉札立にあり、標高約96～99mの台地上に位置する。弓里部落内松山氏宅周辺地域である。台地の北側を安楽川が東から西へと流れている。西側には県道柿ノ木一志布志線が走っている。遺物の散布は、縄文時代晩期・弥生時代中期と思われる土器の破片が見られる。弥生式土器の散布は顕著で広範囲に散布し、土器の破片も大きいものが多く見られ、遺物包含層への影響が考えられる。この台地は付近は個人で基盤整備を実施している所もかなり見うける。

③⑧ ^{みのおぎこ} 養輪迫遺跡

志布志町内之倉養輪迫にあり、標高約93mの台地上に位置する。台地の北側は安楽川が流れ、台地は北側（安楽川方向）へゆるやかな傾斜をしながら、安楽川により出来た浸食

谷へと滑り込んでいる。西側は県道柿ノ木一志布志線が走る県道寄りの台地一帯で、遺物の散布は少ないが、広範囲に見られる。しかし、場所によっては濃密な散布を見る所も確認される。同地区は個人による基盤整備の行なわれている個所も確認される。縄文土器、弥生式土器、土師器、石鏃などの遺物の散布が見られる。

㉞ ゆばがお 弓場ヶ尾遺跡

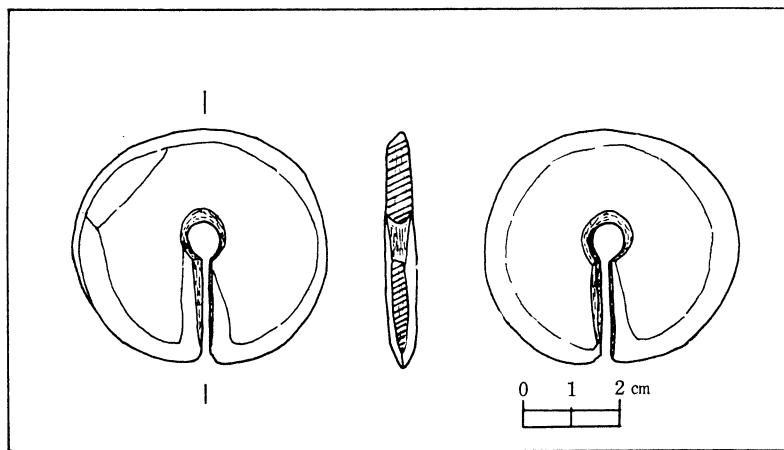
志布志町内之倉弓場ヶ尾にあり、標高約 106 m の台地上に位置している。台地の眼下北側は安楽川が流れ、その比高差もかなりある。東側は浸食谷となり山林地帯へと連なっている。丸立遺跡・蓑輪迫遺跡とともに同一台地に位置する。弥生式土器と思われる土器の破片、石鏃などの散布が見られ、散布状態は多くはないが、場所によっては、かなり大きい破片も確認される。

㉟ くらのの 倉園遺跡 (遺跡地図番号 68-026・027) 発見の玦状耳飾 (第 6 図)

志布志町内ノ倉倉園にある倉園遺跡内で発見されたもので、志布志高校在学学生、前田昭君の採集遺物である。県内の出土例も多く見られるようになった。

石材は硬玉で長さ 4.8 cm、幅 5.2 cm、厚さ 0.6 cm の扁平で、ほぼ円形に近い形状である。中央よりやや外周端部より約 1 cm の円孔が見られ、これより外周端部へ幅約 0.2 cm の切り目がぬけており、外周は鋭角に磨かれ、円孔は両側から穿ってある。切り目は片面ずつ交互に磨かれている。採集品のため時期は明らかでない。

倉園遺跡は、吉田式・前平式・指宿式・鐘ヶ崎式などの土器、石皿・局部磨製石斧などの遺物がみられる。
(注㉟)



第 6 図 倉園遺跡採集の玦状耳飾

第6節 末吉町管内の遺跡・遺物

末吉町は曾於郡の北部に位置し、北東は宮崎県との県境の都城市と接し、北西は財部町、西は大隅町、南は松山町、東南は志布志町に隣接している。

地形は南之郷を中心とした山岳地帯、南九州特有の火山灰土壌のため、大淀川、菱田川、村山川、獅子込川、久保川など大小河川により浸食谷が多く見られるシラス台地、大小河川流域は浸食により低地となり水田地帯とに大別される。

本年度、調査は南之郷久保地区を中心に実施した。遺物の散布は少ないが広範囲にみられる。畑地は大幅な削平が見られ、平坦化され、遺物の散布の認められる地点も確認される。各遺跡について概略を述べる。

④② ^{うしろたにだ}久保後谷田遺跡

末吉町南之郷後谷田にあり、標高約230mの細長い舌状台地上に位置する。南および東側は県道南之郷一大隅線が走り、久保川が流れ、さらに台地を隔てて大淀川が流れ、流域は水田地帯となる。北および西側は浸食谷となり、水田が立地し、その比高差は約47mである。台地の西南側に檜小学校がある。台地上面は馬背状を呈したシラス台地である。

遺物の散布は縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石匙、黒曜石製の剝片がみられる。

調査地点は、台地中央付近を農道が横断しており、農道北側沿いの畑地において実施した。同台地は馬背状を呈しているためか個人で基盤整備を行っている個所がかなりみられ、遺物包含層は削平されており、本遺跡において縄文時代晩期の包含層の残存が認められ、耕作のためか包含層まで浅い為に広範囲に攪乱を受けている。

層序については、第1層、耕作土（黒褐色火山灰土で、下部に黒色火山灰土が認められる。）第2層、黄褐色火山灰土層で縄文時代晩期の出土がみられる。第3層、灰褐色粘質土層、第4層、黒色粘質土層、縄文時代前期の土器と集石遺構が認められる。第5層、黄褐色粘質土層となる。色調については今後検討し、詳細は本報告書で述べる。

出土遺物は、縄文時代前期と思われる土器の破片、縄文時代晩期（黒色研磨土器、浅鉢）の土器片がみられる。

④③ ^{たにのくちわき}久保谷ノ口脇遺跡

末吉町南之郷谷ノ口脇にあり、人家周辺の標高約228mの台地縁辺部に位置する。台地縁辺部の眼下南側は久保川が流れる。遺跡北側沿いは県道南之郷一大隅線が走り、県道沿い北東へ約200mの所に共同墓地がある。この遺跡では、縄文式土器、弥生式土器、土師器などの破片散布が見られる。層序については、後谷田遺跡と同じで、第2層、（黄褐色火

山灰土)の残層より縄文時代晩期の葉状沈線文土器の出土がみられる。他地区は、個人の基盤整備のために大幅な削平が認められ、遺物包含層は認められない。

第7節 大崎町管内の遺跡、遺物

大崎町は曾於郡の最南端にあり、西は肝属郡串良町および鹿屋市に接し、南は東串良町、北は大隅町、北西は輝北町、東は有明町、北西は輝北町に隣接し、南東部に志布志湾に面した海岸線をもっている。

地形は、全体的に平坦地であり、草野岡が標高240m、尾の鼻が標高191mを示し、山岳と認められるものはない。台地は平坦地が多くみられるが、河川流域は浸食谷がみられ、その谷沿いに水田がある。田原川、持留川、菱田川の下流は沖積平野となり、水田地帯となっている。

本年度、調査は神領地区、益丸地区、飯隈地区の一部において実施し、特に神領地区を中心に悉皆調査を行った。特に神領古墳群の周辺地域は都市計画区域内に入り、道路網の整備、住宅地などの整備が計画され、一部実施に移されている。各遺跡について概略を述べる。

⑭ じりょうこふんぐん 神領古墳群 (遺跡地図番号70—37) の周辺

大崎町神領地区にあり、標高約20~26mの略三角形の舌状台地に位置する。同台地は大宇神領・横瀬・仮宿に大別されている。台地の西側を田原川、東側を持留川が流れ、南側において両河川が合流し、志布志湾へと流れ込んでいる。両河川に挟み込まれた台地上で、遺跡立地に最良の地形を呈している。同台地は、神領下原、横瀬天子下・天子前・龍相・小城・八島ヶ迫・道上・坂ノ上・後迫・弁付・仮宿町下・飛別府との小字に細分されている。

同台地内には、神領古墳群があり、遺跡地図によると、70—17、天子前遺跡(弥生)、70—18天子丘遺跡(弥生)、70—19、龍相遺跡(弥生)、70—36、天子の前土壙(仿製鏡、貝輪、直刀、軽石組合せ石棺)、70—37、神領古墳群(円墳11基・前方後円墳2基)70—38天子岡土壙(軽石組合せ石棺)などが記載されている。今回はさらに再確認するために分布調査を実施し、字小城・八島ヶ迫・下原・道上、飛別府・道上に於いて弥生式土器、土師器、須恵器の散布を確認した。地下式横穴は聞き取り調査を実施し、その結果、地下式横穴と思われる数ヶ所の存在を知ったが、確認調査を待たなければ断定は出来ない。また龍相城(井出田城とも言う)址が字龍相・小城にまたがって存在し、同城址内では弥生式土器・土師器の散布も顕著に見られる。

同台地内の神領古墳群は数基を残すのみで、現存している高塚古墳も削平がみられたり、石棺の一部と思われるものが露出したりしている。同古墳群は住宅地内にあり、都市計画区域内であり地形の変化が年を増すごとに著しい。

④⑤ ^{さわめ} 沢目遺跡（遺跡地図番号70-1, 70-21, 70-44）

大崎町益丸沢目にあり、標高約10mの砂丘末端部に位置している。砂丘は田原川東岸より始まり、その田原川東岸沿いに遺跡は位置し、その比高差は約3mである。遺跡地の北側は、田原川によりできた沖積低地で水田地帯となり、南部も水田地帯となっている。神領古墳群の立地する舌状台地端部より約600mの所にある。

同遺跡地は、砂採集のために一部削平が行なわれ、遺物の散布が多く見られ、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器などの遺物の破片が散乱している。

同遺跡の立地する砂丘一帯はいたる所で砂採集事業が行なわれ、砂丘縁辺部や防潮・防風林内を含む砂丘上に多くの埋蔵文化財の存在が確認され、田原遺跡（遺跡地図番号70-15）などの遺跡が知られる。

④⑥ ^{ふたこづか} 二子塚遺跡

大崎町持留二子塚にあり、標高約140mの火山灰台地縁辺部に位置する。同台地の西側は浸食谷となり、その比高差は約40m以上である。その台地縁辺部は串良町との町境となっている。北側沿いには標高196.3mの二子塚があり、東側沿いは県道黒石一串良線がほぼ南北に走っている。遺跡地図によると、縄文式土器（市来式・指宿式）・有肩石斧・打製石斧の出土地となっている。

今回、それを再確認する為に、二子塚周辺地域の悉皆調査を実施した。二子塚遺跡は、縄文式土器散布のほか弥生式土器の散布も顕著に見られる散布地である。

二子塚遺跡の北側にある二子塚（茶ノ木部落の北側）の東側、県道黒石一串良線の両側の畑地一帯にも遺物の散布がみられた。標高約150mの畑地に位置し、遺物の散布が著しく広範囲に見られ、縄文式土器（前期・晩期）、弥生式土器、扁平打製石器、石鏃、黒曜石製削器などが見られる。

④⑦ ^{ちおうじ} 地応寺発見の地下式横穴

大崎町菱田地応寺にあり、標高約20mの台地縁辺部に位置する。台地の東側は菱田川が流れ水田地帯となっており、その比高差は約17mである。台地周縁部を町道が走り、町道西沿いに有明町飛地の東側みかん園に位置する。同台地は基盤整備事業がすでに終り、階段状の畑地（みかん園団地となる）の断面に地下式横穴が2基確認された。

層序については、第1層、黒色火山灰土で下部にパミスがみられる。第2層、茶褐色粘質土層、第3層、黒褐色粘質土層・第4層、灰茶褐色粘質土層、第5層、黄褐色シラス質層（小礫混入あり）、第6層、黄色シラス層となる。玄室天井部は第4層、灰茶褐色土層中にみられ、玄室床面は判明されない。色調については今後検討し、詳細は本報告で述べる。

第8節 鹿屋市管内の遺跡・遺物

鹿屋市は大隅半島の中央部にあり、北は輝北町、南は吾平町および大根占町、東は串良町および高山町、北西は垂水市、北東は大隅町の各町と隣接し、南西は錦江湾に面した海岸線をもっている。

地形は、大籠柄山・高隈山・御岳・横尾岳・陣ノ岡を中心とする山岳、高隈山地に源を発する肝属川により二分される台地（北側笠野原台地一帯・南側鹿屋航空基地から下堀・萩塚にかけての台地）、肝属川・高須川・大始良川を中心とする大小河川により浸食された河川流域に立地する水田地域とに分けられる。山岳・台地が大部分の面積を占め、沖積平野にめぐまれず、河川流域にわずかな狭小な水田が存在する。

本年度、調査は南町を中心に実施した。今回は悉皆調査において数多く広範囲に遺物の散布が見られ、縄文式土器、弥生式土器、成川式系統土器の破片がほとんどであり、特に鎖守迫遺跡・牧ノ原遺跡を中心に濃密な散布が確認される。確認調査は船ヶ迫・仮屋園両遺跡で実施した。各遺跡について概略を述べる。

④⑧ ふながさこ 船ヶ迫遺跡

鹿屋市南町船ヶ迫にあり、標高約50mの舌状台地上に位置する。台地の眼下北側は、肝属川の支流である大始良川が流れ、その比高差は約27mである。東側は南川・西側は獅子目川が大始良川に流れ込んでおり、各河川流域に狭小な水田地帯が発達している。この遺跡では縄文式土器、弥生式土器、成川式系統土器などの破片の散布が見られる。

調査地点は、舌状台地の北側縁辺部を走る県道小浜一高山線の楠原より南北に走る農道（約900mの地点）の東側一帯の畑地である。遺跡地内の畑地は開拓開墾時か、個人の基盤整備のためか、大部分において削平が行なわれ、平坦化された畑地となっている。標準層序は、第1層、耕作土（灰黒色火山灰土）、第2層、黒色火山灰土層、第3層a、黄褐色砂質層、第3層b、茶褐色土層、第3層c、茶褐色土層（やや粘質気味）、第4層、黒褐色粘質土層、第5層、ボラ層、第6層、黄褐色粘質土層で下部パミス層、第7層、黒色粘質土層となる。

出土遺物は、第3層a（黄褐色砂質層）、成川式土器の底部か土器の細片が見られ、ほとんどの地点で確実な層序はみられず、遺物包含層が削平されたりしている為に苦慮した。土層の色調については仮称で、今後検討し、本報告で述べる。

④⑨ かりやどの 仮屋園遺跡

鹿屋市南町仮屋園にあり、標高約50～53mの舌状台地の西側縁辺部に位置する。台地の眼下に獅子目川が流れ、その比高差は約21mである。本遺跡地は後ヶ迫遺跡まで東へ約

200 mの所にある。この遺跡は、縄文式土器、弥生式土器の破片が多量に見られる。

調査地点は、台地縁辺部寄りの農道東沿い畑地（標高51m）と農道の西側の微傾斜面を中心に実施した。農道東沿い畑地は成川式遺物包含層が削平されているが、残存している地点も数ヶ所確認された。しかし、土の移動が激しく見られ、地表面下約30cmで土器の細片が多量に確認される所が多い。一方、小高い傾斜面の畑地の地点は、完全に遺物包含層は削平されている。しかし、平坦面の畑地と隣接した地点に於いては、地表面下約40cm（第3層c）で縄文晩期の土器（黒色研磨土器、粗製土器など）、打製石斧、石皿などの遺物の出土がみられるが層序については、後ヶ迫遺跡と同様の層序がみられる。

^{ちんじゆぎこ}
⑤⑩ 鎮守迫遺跡

鹿屋市南町鎮守迫・桑ヶ迫・大脇ノ下にあり、標高60～73mの台地上に位置する。台地は西側は獅子目の上流付近で、東側は南川が流れており、細長い台地（約270m）となり南側は陣ノ岡への連山が迫っている地点にある。同遺跡地内は以前寺があったとされ石造物の残存がみられ、また鎮守迫を中心に濃密で広範囲に遺物散布が確認される。成川式系統土器（丹塗り、高坏・突帯・口縁部・底部）が主体である。過去において完形品の出土も数点見られ、土地所有者により保管されている。

^{いしき}
⑤⑪ 伊敷遺跡

鹿屋市南町伊敷にあり、標高45～60mの台地上に位置している。同台地は眼下西側は南川が流れ、狭小な水田がならび、その比高差は約20mである。東側は約100mの山林となる。台地上も比高差が約20mあり階段状を呈している所も見られ、個人による基盤整備の行なわれている地点も見られる。この遺跡は、縄文式土器（組織痕土器、黒色研磨土器）、弥生式土器（突帯、丹塗り）などの多量の土器の破片、有肩打製石器2、磨製石斧などの石器の散布がみられる。

^{まきのほら}
⑤⑫ 牧ノ原遺跡

鹿屋市南町牧ノ原にあり、標高約60～71mの略三角形の台地に位置している。同台地東西両側を南川が流れ、その比高差は約10～20mである。伊敷遺跡より南側台地一帯が本遺跡となる。ここも階段状を呈している地点や個人による基盤整備の行なわれている地点がかなり見られ、台地内南側は地表面に「ボラ」のみられる地点が多い。ボラの見られる地点は土器の大きい破片が濃密に見られ、おそらく削平されており遺物包含層まで影響を与えているものと考えられる。この遺跡は縄文式土器（晩期）弥生式土器（竹管文・突帯・あげ底脚付など）、青磁などの破片が多量で広範囲に見られる。

参考文献一覧

- ① 鹿児島県教育委員会『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』（『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（6）） 1977年
- ② 田辺昭三 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ 1966年
- ③ 鹿児島県教育委員会『鹿児島県遺跡地図』 1973年
- ④ 佐賀県神埼郡東背振村三津字永田出土の土器
- ⑤ 高山町郷土誌編纂委員会 『高山町郷土史』 1964年 P 68より所収
- ⑥ 鹿児島県教育委員会 『鹿児島県市町村別遺跡地名表』 1977年
- ⑦ 芹沢長介「マンローがケンブリッジ大学に寄贈した日本の資料その他」『考古学研究』95・96 1977年
- ⑧ 鹿児島県考古学会 『鹿児島考古』 第5号 1971年
- ⑨ 鹿児島県考古学会 『鹿児島考古』 第9号 1974年



1. 上小原古墳群内出土の須恵器



2. 上小原古墳群内出土の
須恵器 左側面



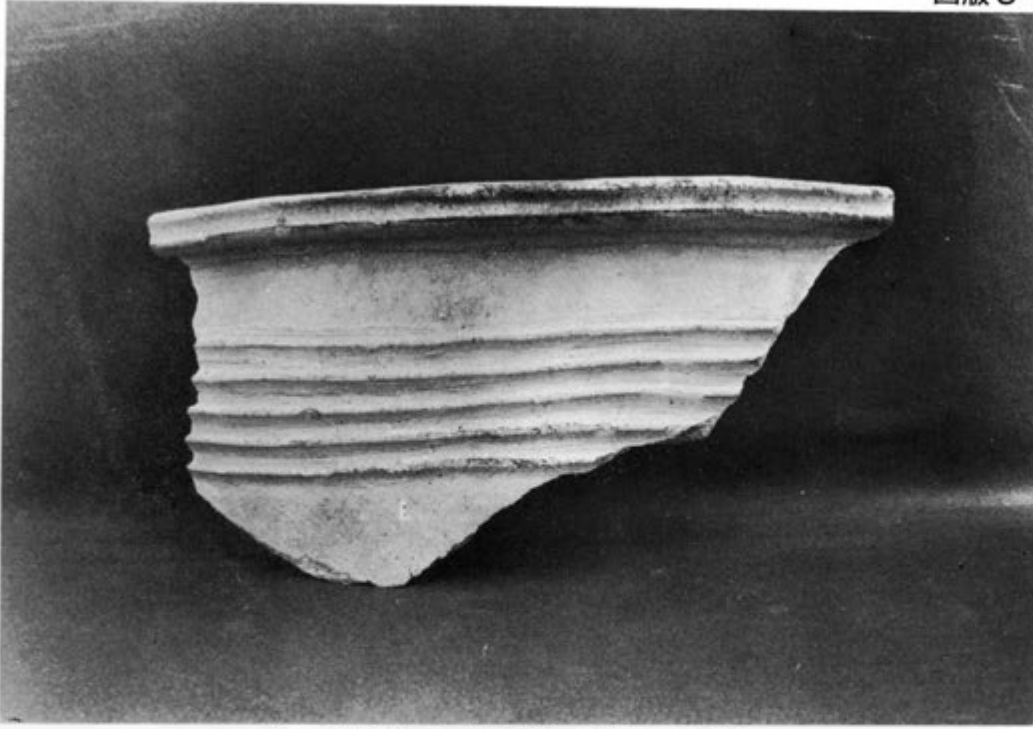
3. 上小原古墳群内出土の須恵器
右側面



1. 上小原古墳群出土の須恵器



2. 上小原古墳群出土の須恵器



1. 串良町フゾ山遺跡 (甕棺口縁部)



2. 串良町フゾ山遺跡 (甕棺底部)



1



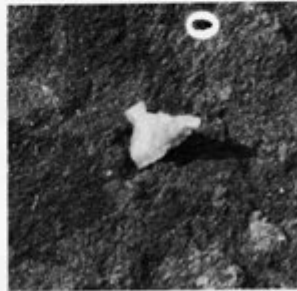
3



2



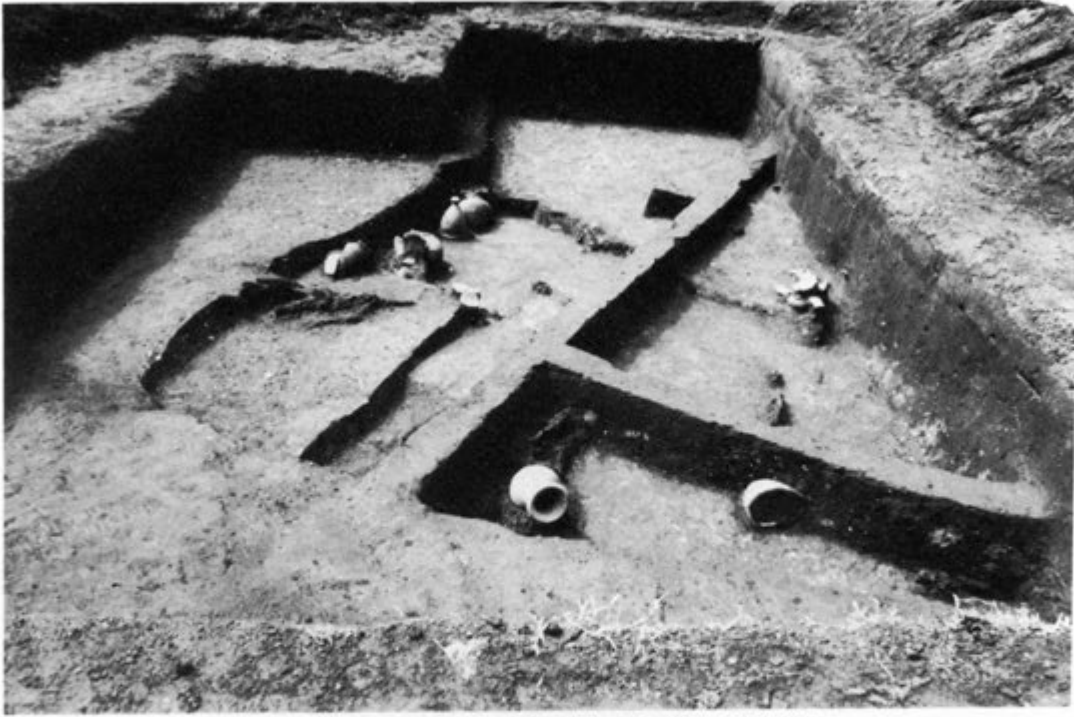
4



5



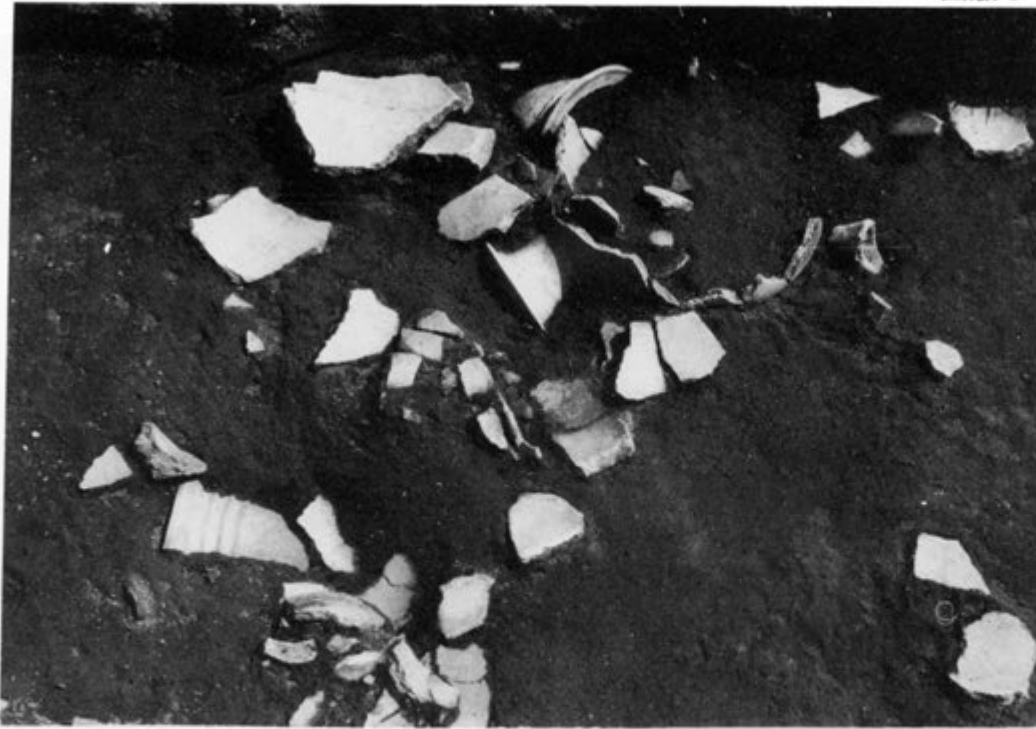
古園遺跡 (1~3) ・倉園遺跡 (4) ・別府大迫遺跡 (5) 6
久保谷ノ口脇遺跡 (6)



1. 串良町吉ヶ崎遺跡、住居跡（土器出土状態）



2. 串良町吉ヶ崎遺跡、住居跡（ピット検出状態）



1. 高山町塚崎遺跡土器出土状態



2. 高山町塚崎遺跡土器出土状態 (櫛目波状文)



1. 高山町上原遺跡、住居跡



2. 高山町上原遺跡、土器出土状態



1. 垂水市柁原遺跡、貝塚



2. 鹿屋市南船ヶ迫遺跡、弥生式土器

あ と が き

「新大隅開発構想」に伴って、大隅地区の埋蔵文化財を中心とした文化財の分布調査を実施して、本年度で3か年を経過した。広大な大隅地区だけに、その実績は遅々たるものである。

なかでも、本年度は、従来の分布調査にプラスして遺跡の確認調査を実施したため、分布調査の面の広がり少なかった。

元来、本地区は、遺跡の豊富な地区であるが、こころか年間の調査で、かなりの数の新遺跡を発見することができた。又、これら新遺跡の一部については、確認調査を実施したため、遺跡の概要を把握することができたことは大きな成果と言えよう。特に、文化財の調査は各種の事業に先行していなければ意義が少ないだけに、事前の処置は効果的と思える。

最後に、この調査に参加いただいた協力者及び地元関係者の方々に心から謝意を表したい。

鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (9)

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

発行日 昭和53年2月28日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 有川印刷株式会社